

JBC 第54回全日本大学個人選手権
2月20～22日 / キョーイチボウル宇治

男子 斉藤翔選手が大会2連覇
女子 戸塚真由選手が独走初V

学生連合及び各都道府県連盟所属の大学生による個人王者決定戦「第54回全日本大学個人ボウリング選手権大会」が2月20～22日の3日間、京都府宇治市のキョーイチボウル宇治にて開催され、男女とも同志社大の斉藤翔、戸塚真由両選手が選手権者に輝いた。
(主催：(公財)全日本ボウリング協会)



競技は男女とも21Gのトータルピン勝負。予選12G・準決勝6Gを経て男子24名、女子12名の上位選手がさらに決勝3Gを投じて優勝を争った。

男子

150名が出場した男子の優勝争いは、ともにAシフトで予選を投球した2年生の斉藤選手と3年生の中里隆和選手(沖縄国際大)が僅差のマッチレースを繰り広げた。

予選終了時点では1位・斉藤選手2735、2位・中里選手

2719と、その差は16ピン。準決勝前半3Gは中里選手が51ピン上回って首位に立ったが、後半3Gは斉藤選手が逆に53ピン上回ってその座を奪回。18ピン差で迎えた決勝は、斉藤選手が206・214・192の612、中里選手は220・203・190の613とほぼイーブンのスコアで差は詰まらず、斉藤選手が昨年に続く大会2連覇を達成した。

「1週前に関西学生の個人選手権があって、そのとき15ピンのハンデがある女子に食らいついていけたので、この調子でいけば優勝するチャンスはあると思っていた。ケガもな

く、すべて順調にきていたので、今まででいちばんリラックスして投げることができた。ずっと競っていて、緊張する場面もあったけど(苦笑)」と斉藤選手。

3月には、これまたマスターズ2連覇がかかる全日本選手権が控えている。

「次は社会人の先輩方も加わってくるので、さらに調子を上げていきたい。2連覇とはいかないまでも、上位には残れるように頑張ります」

女子

一方、29名出場の女子は、予選2回戦で299の準パーフェクトを含む783のハイシリーズをマークしたレフティの戸塚選手が、予選終了時点で次位に107ピン差、準決勝終了時には269ピンまで差を広げてトップを独走。決勝3Gも635でまとめ、トータル4631のスコアで堂々の初優勝を飾った。

「調子自体もよかったけれど、レーンが自分に合っていたし、左投げの選手が少なくて、右投げの人よりコンディションの



「自分はこのピンのカバーがヘタクソで人より多くストライクを出せないと勝てないから、最後まで集中して投げた」と戸塚選手



▲「トップとは大差がついていたので、頑張って2位には入ろうと。その目標は達成できました」と最終学年で準Vフィニッシュの伊勢川選手

変化も小さかったことが大きいと思う」と優勝コメントはいたって謙虚な戸塚選手だったが、昨年12月の全日本大学選手権(女子2人チーム戦)優勝と合わせた「大学2冠」達成は、決してフロックではないだろう。

なお、2位には予選4位から尻上がり調子を上げた和歌山大4年の伊勢川華愛選手が入り、現ナショナルチームメンバーの渡辺莉央

(上武大)、鈴木波流(常葉大)両選手はそれぞれ5、6位に終わった。

全日本大学個人選手権入賞者

●男子 (21G)

順位	氏名 (大学)	T/PIN
1	斉藤 翔 (同志社大)	4,666
2	中里 隆和 (沖縄国際大)	4,649
3	田口 智博 (京都産業大)	4,538
4	吉原 正明 (青森中央学院大)	4,505
5	石岡 大空 (青森中央学院大)	4,490
6	久富木 広 (志学館大)	4,462

●女子 (21G)

順位	氏名 (大学)	T/PIN
1	戸塚 真由 (同志社大)	4,631
2	伊勢川華愛 (和歌山大)	4,445
3	安田明香里 (京都産業大)	4,435
4	岩元美咲希 (名古屋産業大)	4,348
5	渡辺 莉央 (上武大)	4,319
6	鈴木 波流 (常葉大)	4,259



▲父・茂雄プロ(42期)が見守るなかで大会2連覇達成の斉藤選手。「高校のときは父が観ていると打てないと言われていた(笑)」そうだ



▲「斉藤君がミスしたときに自分も付き合ってしまった。勝負強さが足りなかった」とわずか17ピン差で準Vの中里選手

NBF 第49回全日本ダブルス選手権 2月18・19日 牧野松園ボウル
51年目のNBFが幕開け!

結成51年目に突入した日本ボウラーズ連盟(NBF)の新しいシーズンが恒例の全日本ダブルス選手権で幕開け。2月18・

19日の2日間、大阪府枚方市の牧野松園ボウルに男子100チーム200名、女子52チーム104名が参加して熱戦を繰り

広げた。競技は予選9G・準決勝3Gを経て男子16、女子8のトータルピン上位チームを3Gの決

勝に選出。計15G(チーム30G)トータルで覇を競った。

その結果、男子は次位に121ピン差をつけて決勝に進出した北海道の寺口卓・保木慎吾選手組が、大会連覇を狙う谷口悠斗・鈴木昭選手組(大阪)の猛追を辛くもしのぎ、トータル6642で優勝。2位の寺口・鈴木選手組は6633と9ピン及ばなかった。

一方の女子は、予選1G目522とロケットスタートを決めた谷口雅美・安田豊子選手組(大阪)が、2位以下の混戦を尻目に終始トップを快走し、30G6463で堂々の優勝。2位は161ピン差の6302で保木絵里・水野由希子選手組(北海道)、前回覇者の木村祐子・新津七海選手組(北海道)は6156で5位に終わった。

(写真提供：NBF)

【男子優勝】寺口卓・保木慎吾選手組(北海道)



▲寺口選手「パートナーを信頼して投げ続けた。緊張感を切らさずに投球できた」

【女子優勝】谷口雅美・安田豊子選手組(大阪)



▲谷口選手「追いつかれる恐怖感が常にあったが、決勝では気持ちの切り替えができた」

全日本ダブルス選手権入賞チーム

●男子 (30G)

順位	チーム	T/PIN
1	寺口 卓・保木 慎吾 (北海道)	6,642
2	谷口 悠斗・鈴木 昭 (大阪)	6,633
3	平中 亮輔・辻本 博樹 (大阪)	6,420
4	清原 康信・五十嵐喜芳 (茨城)	6,209
5	馬淵 裕太・林 賢一 (岐阜)	6,208

●女子 (30G)

順位	チーム	T/PIN
1	谷口 雅美・安田 豊子 (大阪)	6,463
2	保木 絵里・水野由希子 (北海道)	6,302
3	榎原 元子・伴 有希子 (愛知)	6,269
4	片岡 亜紀・大屋 真子 (愛知)	6,161
5	木村 祐子・新津 七海 (北海道)	6,156